

# エゴン・シーレの衝撃と

松田 幸久

## 要旨

エゴン・シーレ (Egon Schiele; 1890生-1918没) はオーストリア=ハンガリー二重帝国で活躍した20世紀初頭の表現主義の画家である。本稿は私がエゴン・シーレの作品を鑑賞した時に受けた衝撃を綴ったエッセイである。レオポルド美術館、シーレ作品から受けた衝撃、シーレとフィンセント・ファン・ゴッホとの関係について回想を交えながら解説する。

キーワード：エゴン・シーレ、レオポルド美術館、自画像、ゴッホ

## 1 はじめに

エゴン・シーレ (Egon Schiele; 1890生-1918没) はオーストリア=ハンガリー二重帝国 (現在のオーストリア) で活躍した20世紀初頭の画家である。美術史のなかでは表現主義者にかぞえられる。ヨーロッパで猛威を振るったスペイン風邪にかかり28歳で夭逝した天才画家である。

ここでは私がエゴン・シーレを知ったきっかけと今にいたるまでの出来事についてまとめた<sup>1)</sup>。

ウィーンに住んでいた知人を訪ねて、10日間程度すごしたのが事の始まりである。これもいい機会だからと、王宮、シュテファン寺院、ウィーン国立オペラ座など王道の観光名所をひと通り巡っていた。シュピッテラウ焼却場やエルンスト・フックス博物館など、今から思えば微妙に“通”なところに行ったりもした。シュピッテラウ焼却場は芸術家であるフンデルト・ヴァッサーのデザインが施されており、かなりデコデコしている<sup>2)</sup>。エルンスト・フックス博物館はウィーン幻想派の芸術家であるエルンスト・フックスの作品展示場であるが、リフォームした建物そのものが展示物といえる。ウィーンを中心部から遠いものの特に苦もなく電車やバスを乗り継いで

行った記憶がある。土地勘が無いというのは時として強い行動力を生むのだろう。

滞在中はナッシュマルクトで食材を買いこんで自炊し、一日分の食費を浮かせて喜んでた。一斤のパン、チーズ、オリーブ、魚の切り身と値札 (ついでにいうと自分の財布) は穴が開くほどみていたのだが、そのせいですぐそばにあるオットー・ワグナー作のマジョリカハウスに気付くことはなかった。

そうやってウィーン中を徘徊していたある日、ミュージアム・クォーター (Museumsquartier; MQ) に辿り着いたのである。

## 2 レオポルド美術館

MQの目玉はレオポルト美術館 (Leopold Museum) とウィーン・ルードヴィヒ財団近代美術館 (Museum Moderner Kunst Stiftung Ludwig Wien; MUMOK) である。二つの美術館は同じ敷地内の左右に建てられている。レオポルト美術館は白色の外観の建物であり、MUMOKは黒色の外観の建物である。資料によると前者は石灰岩、後者は玄武岩を原料としているようだ<sup>3)</sup>。その時は意味もなくレオポルト美術館から先に周回しようと思ったのだが、結局、ウィー

ン滞在中にMUMOKに行くことはなかった。これは私の中でジंकスとなってしまい、まだMUMOKに入ることがない。

レオポルド美術館はルドルフとエリザベス・レオポルド夫妻（順に、Rudolf Leopold, Elisabeth Leopold）により収集された美術品をオーストリア共和国とオーストリア銀行の協力で収蔵・管理する先となった美術館である。開館したのが2001年であり大型の美術館の時間軸で考えると比較的新しい。

シーレについては油彩画、素描、水彩画、散文詩、手紙、チラシ、写真などを展示している<sup>4)</sup>。これらはシーレがこの世に残した芸術的活動の全ての種類といってもよく、レオポルド美術館は“シーレの殿堂”との異名をもつ。展示品の多くは油彩画である。シーレと並び立ってグスタフ・クリムト（Gustav Klimt; 1862-1918）の作品群も錚々たるものがある。日本ではあまりみることのない“オーストリアのゴッホ”ことリヒャルト・ゲルストル（Richard Gerstl; 1883-1908）の作品もある。余談だが、シーレやクリムトの作品は世界中に散らばっているのに対してゲルストルの作品はレオポルド美術館に集まっているので、“ゲルストルの殿堂”と呼んでもいいと思う。

1897年からはじまる分離派の歴史を所属したメンバーの顔写真とともに紹介するコーナーがあったり、ウィーン工房による直線やチェック柄が特徴的な工芸品があったりするなどデザインの展示にも注力している。初めて訪れた時はそういったことはひとつも知らなかった。

建物中央のロビー・ホールは4階分の吹き抜けで、天井は白色の格子がかけられた大掛かりな天窓となっている。床から視線を上げると天窓を通して空がみえた。開放感があって気持ちがよかった。外の街路樹には紅葉を少し過ぎて黄土色をした葉っぱが木の枝に辛うじてしがみついている、冬の到来を予感させた。実際、数日後にはうっすらと積もる程度の雪が降ったのだが、その時期の空や街中の空気は他の季節よりも澄んでいるように感じられた。こういった季節感が天窓を仰ぎ見たときにより強く意識させられてひどく気に入った。

エントランス付近にある美術館のリーフレットをとる<sup>5)</sup>。表紙には丸首の黒いシャツを着た男性の絵があり背後にオレンジ色の植物が描かれていた。なんとなく、この画家の作品が主な展示なのだろうと思ったが、リーフレットを開いてみるとグスタフ・クリムトの名前と《Tod und Leven》（死と生）が印刷されている。この作品は知らなかったものの作風と添字からクリムトの作品であろうことが想像でき「ひょっとすると《接吻》も展示しているのではないか。実はものすごい美術館なのではないか。」とワクワクした<sup>6)</sup>。結局のところ《接吻》はレオポルド美術館には無かった。しかしそれに勝るとも劣らないクリムトの作品群が来館者を待ち構えていた。

レオポルド美術館は入り口が2階に位置している。その階層が1st Groundfloor、1階層上が1st Floor、さらに2階層上が3rd Floorであり、ここにシーレの作品が展示されていた。階層表記で言うと4階にあたるものの1階の階層で地表から2階分の高さになるため、実際は5階の高さに位置する<sup>7)</sup>。シーレの展示室（17番）<sup>8)</sup>にたどり着く前の部屋（18番）の壁面におよそ横200cm、縦130cmほどのサイズの窓が配置してあり、そこから北東方向の景色が広がっていた。

レオポルド美術館から北東となるので、MQエリア外周を囲む旧王宮厩舎の赤茶色の屋根と<sup>3)</sup>さらに奥の美術史美術館の左翼と中央のドームが重なって絵のように広がっている。視点が5階という高さもあって普段の下から仰ぎ見るような視線方向ではなくほぼ真横からの視線となっている。これによって、物体に対する視点の角度、仰角や俯角から導かれる消失点が存在しなくなり、目の前の三次元の建物が二次元の長方形の塊であるような印象を作り出していた。細部を見れば立体的なようであるが全体は平面的なのである。美術史美術館の壁面からドームにかけてバロック様式の装飾がふんだんに施されているにもかかわらず平面に見える景色に、浮遊感と不思議な“解像感”とも言うような感覚を覚えた。レオポルド美術館はMQエリアを歩いている時点で建物の外観に感動したり館内で新しい物事に触れたり、とにかく刺激的だったのだが、この窓の景色もそのう

ちの一つだった。

ところで、ホームページのバーチャル・ツアー<sup>9)</sup>でその窓を観察すると作品紹介のプレートが貼り付けられていることがわかる。つまり、作品として意図的に配置しているようであり、私は製作者の狙い通りに入ってしまったというわけだ。

### 3 ルームナンバー 17

シーレの作品にたどりつく前の時点で感性がグラグラと揺さぶられ、意識がフワフワと浮き足立っていた。改めて振り返ってみるとシーレの作品群に感動したということだけではなく、レオポルド美術館という建築物、館内にあったクリムトの作品、ウィーン工房の工芸品など、17番の部屋に至る前の時点で相当、魅せられていたと思う。

さて、ようやくシーレの展示室である。この時の私にとってはクリムトかそれ以外の知らない画家という程度の認識しかなかったの、むしろ先入観なくシーレの作品群と対峙することができたのだが、今となっては幸せな時間であり我がことながら羨ましい。

17番の部屋、シーレの作品群が掲げられている部屋の中で漠然と抱いた感情、それは荒涼とした寂寥だった。とにかく全体が寂しかった。それは孤独でもあったし荒んだ睨みでもあった。

その空気感を伝えるために、ここでは《Autumn Tree in Turbulent Air (winter tree)》を紹介する。ほぼ正方形(80×80.5cm)のキャンパスに一本の捻れた枯れ木が描かれている。薄暗い茶色に塗られた木の幹は細々として弱々しく「？」の記号のようであり、キャンパスの枠内にこれでもかというほど振り曲げられて押し込められている。幹からはこれまでまた細い枝が伸びているが、鏡を割った時にできる線のように絵の全体を分断している。では、なにか分断されてしまった対象物があるのかというところである。捻れた木の背景に広がるのは曇天であり、木の幹と枝によって分断された領域には塗り殴られた灰色があるのみである。薄汚れたザラザラなコンクリート面にある雨のシミのような灰色が雲と雲の重

なりを表している。所々、ほんのりと薄く赤色混じりの灰色が塗られているが、その赤色はただ筆に残っていた色が滲み出ただけであるようにも思える。木の枝の先には黄土色の実のようなものが小さく添えられている。

特徴といえばそれだけである。多少のアクセントがあるとはいえ、背景は曇天のみであると言ってよい。つまりそれらが分断されたからといってその存在に何も影響がない。にもかかわらず明らかに曇天を木の幹と枝が分断している。実際、そのように塗った筆の跡がある。この絵の存在はこれほどまでに不可解である。貶めるような言葉を書き連ねたが、事実、その通りなので仕方がない。

ところがこの作品には歪みがない。キャンパスの中で、ひどく素朴な、粗末な、歪んだオブジェクトが“安定して”成立している。私はこのオブジェクトからひどい寂寞の念と怨念を感じたのだが、その暗い念が真正面から折り目正しく安定して伝わってくる。人間で喩えると、誠実な人間が背筋を正し真っ直ぐにこちらの目を見て、決して卑屈になることなく正々堂々、淡々と「私はひどく孤独で寂しい気持ちで生きている」と語ってくるようなものだ。強く安定した不安定感だった。これらの感情の記述は、この後にシーレの生涯とその作品に触れてきた今の表現なのだが、この時の私の頭には「一体全体、なんなのだろう」という混乱と困惑しかなかった<sup>10)</sup>。

もちろん、もっと単純な感想の方が多い。《Hermits》を見た時には「ジョジョの奇妙な冒険第3部のスタンドみたいだなあ。ジョースターのスタンド名もハーミットパープルだったなあ<sup>11)</sup>」と思ったし、自画像である《The Poet (Self-portrait)》や《Self-portrait with Death (Man and Death)》に対しては不気味で気持ちわるかったので一瞥して立ち去ったりもした。なお、今でもキモいと思っている。

### 4 エゴン・シーレという衝撃

そうこうするうちに、名前を知らない画家の作品にだんだんひきこまれていった。全体的に寂寞とした印象は変わらないが、時々、素朴な温かさを感じ

るものもある。例えば《Self-Portrait with Striped Shirt》の眼差しや《Setting Sun》の夕日に照らされた薄赤い空、島、水面などである。

シーレの作品は80cm×80cmだったり、150cm×180cmだったり、中型から大型の作品が多い。そんな作品群に紛れるように一對の小さな人物画が展示されていた。それぞれA3サイズ程度の大きさでシーレの展示室の中では比較的小さい。一つには男性が、もう一つには女性が描かれている。男性の方は丸首の黒シャツを着ており、リーフレットに印刷されていた作品だとすぐにわかった<sup>12)</sup>。

寄っていく数メートルの間に描かれた人物の視線に囚われていった。人物は作者自身であった。つまり自画像だった。絵画の中の人物と視線を合わせてみると強烈な居心地の悪さを感じた。私の目線の高さにちょうどその自画像がある。泰然自若とした佇まいであり、服飾で着飾ることなく、反対に裸体で奇を衒い注目を集めようともしていない。白い背景に、黒シャツ、黒髪、黒い瞳の自身を置いている。背後には赤みがかかったオレンジ色の花のような植物がアクセントとなっているが、あくまでもこの絵の主体は彼自身である。彼の佇まいから周りの空気が彼の存在にかしずいているように感じられた。

目線の高さは同じであるが、絵の中の作者はこちらを見下している。見下すといっても侮蔑の意味はない。彼自身が自分の行く末を確信し、この世界に己の矜持を打ちつけるという強烈な宣戦布告をキャンパスに叩きつけた様だ。その上で鑑賞者に語りかけてくる。「今の君はどうなんだ？まあ、オレにとっては知らないことだけど」と。

シーレの瞳からは強烈な斥力を感じた。作者の自信と確信が自身をとりまく空気の密度を上げ、他の存在を寄せ付けない。自然とそこにいてだけで強烈に周囲の存在を押し除ける。そんな斥力だ。それゆえに真正面に立った時に居心地の悪さを感じたのだった。

間近でみた一瞬のうちにエゴン・シーレに魅了されてしまった。これほどまでに自信家である一方で、別の作品では世界から拒絶されていると言わんばかりの寂寥感と暗惨とした作品を緻密に描く。かといっ

て己の殻に閉じこもるでもなく発散的、挑発的な作品があり、ときに（いや、実のところかなり多くの）扇情的なヌードを描く。彼の精神世界は変幻自在であり捉えどころがない。捉えよう、理解しようとする。「まだそこに居るのかよ」とどこかであざ笑う。隣の青い目をした優しい表情の女性、《Portrait of Wally Neuzil》が「この人はそういう人なの」と笑っているようでもあった<sup>13)</sup>。

シーレの衝撃にあてられたまま、ゾンビの様にフラフラとレオポルド美術館のお土産屋に行く。カタログを買いたかったが、その時はお金がなかった。印象深かった作品が印刷されているポストカードを数点手に取る。隣にはA3サイズほどの収蔵作品をコピーしたポスターが並んでいたの、その中からシーレの自画像を探し出し購入した。値段は15ユーロだった。

## 5 対極にいるゴッホ

シーレに囚われてしまった原因はフィンセント・ファン・ゴッホ (Vincent van Gogh; 1853-1890) の自画像にもある。いつ、どこでだったか忘れてしまったが、ゴッホの自画像を初めて見た時に絵の中の瞳は暗く虚ろだと思った。虚ろだと思った時、ゴッホの瞳の奥の陰惨な真つ暗闇の中に精神が引っ張られるような感覚を覚えた。つまり強烈な引力を感じたのである。

そう感じたのはゴッホのままならない人生を紹介していた本が無意識に引っかかっていたからかもしれないし、テレビで見聞きしたゴッホの苦勞人像という先入観からかもしれない。原因が何であれ、主観的なことなので原因があったとしても他者にとっては意味がない。ただ、シーレの自画像に感じた斥力はゴッホの自画像に感じた引力と対になってピタリとはまった。シーレが好きなのはゴッホのせいだし、ゴッホが好きなのはシーレのせいだと納得するようになった。

私がシーレとゴッホを結びつけたのはただの偶然なのだが、実際、シーレはゴッホを敬愛していた。ゴッホが死んだ年にシーレが生まれているが、シーレは

その偶然に運命めいたものを感じ周囲に語っていたらしい。ゴッホの《ひまわり》のオマージュとして《Sunflower II》(ひまわり)を描いている。シーレらしく黒く塗りつぶされた一本のひまわりで、ゴッホの繚乱としたひまわりとは対極にある。また、ゴッホの寝室を描いた《Vincent's Bedroom in Arles》(アルルの寝室)に対するオマージュとして《The Artist's Room at Neulengbach》(ノイレングバッハの画家の部屋)を描いている。

これらの作品は日本でも展示されたことがある。2019年に「日本・オーストリア外交樹立150周年記念 ウィーン・モダン クリムト、シーレ 世紀末への道」と題した大きな展覧会が開かれた<sup>14)</sup>。場所は東京の国立新美術館と大阪の国立国際美術館であり、日本で開かれる展覧会の中でも最大級である。東京会場に行ったのだが、シーレのコーナーでは一点目から《Self-Portrait》(自画像)、《The Artist's Room at Neulengbach》(ノイレングバッハの画家の部屋)、《Sunflower II》(ひまわり)の順に展示されていた。私にとっては最初からフルスロットルでとばす様な並びであり、相当、攻めた勢いを感じた。鑑賞者はどんな反応をするだろうと思ひ少し離れてしばらく待ってみた。しかし、くる人くる人、皆がこの三作を一瞥するだけで次へと向かう。人気があったのがビーダーマイアー時代の絵画、ハンス・マカルト(Hans Makart; 1840-1884)による写実的な作品、クリムトの《Portrait of Emilie Flöge》(エミーリエ・フレーゲの肖像)などであった。やはり、シーレはマイナーな画家なのかと妙に納得しつつ、誰も止まらないが故に三作を十分に観察できたので嬉しくもあった<sup>15)</sup>。

## 6 2023年のシーレ

ここ何年かエゴン・シーレへのこだわりを形にしたいと考えていた。本稿と別稿の「エゴン・シーレ作品のカタログ・レゾネ」は2021年出版の“Egon Schiele: Paintings, Watercolors, Drawings”(改訂第2版, Elisabeth Leopold編)<sup>16)</sup>に合わせて発表しようと思ったりもしたのだが今まで手付かずのまま

でいた。

ようやく着手した時に、30年ぶりに日本で「レオポルド美術館 エゴン・シーレ展 ウィーンが生んだ若き天才」と題した展覧会が開かれることを知った<sup>17)</sup>。会期は2023年1月26日から4月9日とのことである。今回のタイミングには間に合いそうだ。この完成原稿を持ってシーレに会いにいこうとしよう。

## Appendix A

問い合わせ・連絡先: ymatsuda@ishikawa-nu.ac.jp

## 引用文献と注記

- 1 読み物風になっているが、研究ノート扱いということでも理解してもらいたい。
- 2 同様のものに大阪の舞洲ゴミ処理場がある。
- 3 著者不明 (2001). *Les arts a vienne2001/02* ウィーンアートイヤー. 出版社不明
- 4 Leopold Museum Private Foundation (eds.). (2018). *Egon Schiele: Masterpieces from the Leopold Museum*. Buchhandlung Walther König. 5 Leopold Museum-Privatstiftung. (2002). Leopold Museum. Unknown.
- 6 本稿では読みやすさを重視して作品名は英語の表記を優先し、ドイツ語の表記は割愛した。
- 7 Leopold Museum-Privatstiftung. (2002). *Museum Plan: English*. Unknown.
- 8 シーレの展示室は、今は13番に移動している。
- 9 Virtual Toure Through “Vienna 1900”.(n.d.). Retrieved October 3, 2022 from <https://www.leopoldmuseum.org/en/digital/virtual-tour>
- 10 Tobias G. Natterのカタログ・レゾネによると本作品は1912年に制作された直後にウィーン工房による作品の愛用者であるMagda Mautner-Markhofによって600クローネで購入されている。購入者はよほど気に入ったのだろう。引用文献: Natter, T. G. (Eds.). (2017). *Egon Schiele: The Complete Paintings, 1909-1918*. TASCHEN.



- 11 荒木 飛呂彦 (1989-1992). *ジョジョの奇妙な冒険 Part3 スターダストクルセイダース* (全17巻) 集英社
- 12 この作品には先入観なく向き合ってほしいので、本稿では作品名を記さないこととした。ただし、ここで紹介している特徴に該当する自画像は1枚しかないので容易に推測できてしまうのが残念である。
- 13 この作品のモデルでありシーレの彼女だったヴァリー (Wally Neuzil) には、その後とんでもない人生が待っているの、それを知っていたならば「そういう人なの」などと鷹揚なことはいわないだろう。
- 14 国立新美術館・読売新聞社・ウィーン・ミュージアム (編) (2019). *日本・オーストリア外交樹立150周年記念 ウィーン・モダン クリムト、シーレ 世紀末への道* 大日本印刷
- 15 この展覧会では《Portrait of Arthur Roessler》, 《Portrait of Ida Roessler》, 《Portrait of Otti Wagber》, 《Nude Girl (Gertrude)》など、シーレの代表作が多く展示されていた。全体的に通常では考えられないほどの多くの作家や画家の代表作が並んでいたのだが、図録によると収蔵元であるウィーン・ミュージアムが数年にわたって改修のために閉館されるとのことで“これほどの規模で素晴らしい所蔵品の数々を日本で展示することができました”ということらしい。おそらく二度とこういう機会はないと思う。引用文献：引用文献と注記14番, 9頁。
- 16 Leopold, E. (Eds.). (2021). *Egon Schiele: Paintings, Watercolors, Drawings*. Himer verlag.
- 17 レオポルド美術館 エゴン・シーレ展 ウィーンが生んだ若き天才. (July 20, 2022). Retrieved October 3, 2022 from <https://www.egonschiele2023.jp/index.html>

## The impact of Egon Schiele on my life

Yukihisa MATSUDA

### Abstract

Egon Schiele (b. 1890 -d. 1918) was an Expressionist painter of the early 20th century, active in the Austro-Hungarian Empire. In this essay, I detail how Egon Schiele's work has influenced me. I present my impressions of the Leopold Museum and discuss the influence of Schiele's work and his relationship with Vincent van Gogh's work.

Keywords : Egon Schiele, Leopold Museum, self-portrait, Vincent van Gogh

DOI : 10.15096 / UrbanManagement.1513

